

● 白州だより

白州郷牧場から冬のおたよりをお届けします！

<http://www.hakusyu.jp/> info@hakusyu.jp

2013年12月22日

二十四節気 冬至

発行 白州郷牧場

山梨県北州市白州町横手 2259

TEL : 0551-35-4520

FAX : 0551-35-0132



近代の黄昏

白州郷牧場グループ代表 椎名 盛男

昔、ある人から人間60才をすぎると＝つまり歳を重ねると人は未来でなく過去と暮らすようになっていられると言われたことがある。ふと気付くと自分もそうなっていることに気づかされる。人生には坂道が3つあるとも言われた。上り坂、下り坂、そして、マサカという坂がある、と。これも、すでに経験したが記憶として遠いものとなった。

年をとるということは、この世のことはどうでも良いことなのだろうが、それでも日本の将来を考えると心配になる。ラクダの背中にワラ1本という言葉がある。ラクダの背にワラ1本つつ積んでいくと、いつかボキと背が折れる日がくる。日本と地球(世界)は、すでにこの臨界点に来てしまっているのではないかという心配である。本当に人口70億人に地球は耐えられるのか、安倍氏以外、大丈夫と言いきれないのではないかと思うからである。

すでに耐えられない兆候はいたる所にみられる。

水の問題、食の問題、環境の問題等、いたる所に危機が見えだした。

もう世界は持たないと考えているのは私だけだろうか。今だ、経済成長という成長神話を日本の多数は信

仰している。原発は安全神話でなかったのか。ベラルーシを参考にすればあと20年くらいで関東はベラルーシの道を歩むだろう。多分、東京を中心とする首都圏は、ベラルーシの首都ミンスクのようになるだろう。20年かけてミエミエでないジェノサイドはゆっくり進み、首都は誰も住むものがいなくなり滅亡となる。その日まで人々は、枕を高くしてただただ生活をむさぼっているにちがいない。

もう、老子の言うように無為自然がいいのだろう。

ここ何年か、スローフードとか、自然との調和とか、環境と食の持続可能な生活とかの言葉が身のまわりでも増えてきた。

私はこの現象を見て、デカルト以降の近代哲学(主観主義、観念論)は終わりになるのではないかと思ったりしている。

ここまで進んだ環境破壊も社会崩壊も元をただせばドイツ観念論だ。

デカルト以来の近代が終わるのだ、と思うことにした。だから、今おきていることもグローバリゼーションでなく、世界はもう近代の黄昏をみているように、ポスト・グローバルの時代と捉えようと思っている。



書評

「ゼロからの挑戦」 PHPビジネス新書 稲盛 和夫 著



本書では、稲盛和夫氏が実践してきた経営の、そして生き方の哲学(「フィロソフィ」と、大部分を、フィロソフィの根底にあるもの(「稲盛和夫氏の思想」)が語られています。(以下抜粋です)「原理原則『人間として正しいか』を貫く。人の心をベースにする。考え方×熱意×能力(生きる姿勢)。思いやる心。利他。情けは人のためならず。誰にも負けない努力、創意工夫。動機善なりか、私心なかりしか。世のため、人のために尽くす。心を高める。」

稲盛氏の著作は、私が社会にでたばかりの頃、薦められ、勉強した本でした。稲盛氏のこれらの思想は、そういうものなのだと、素直に受け止め、自分も実践してみようと思いました。一人相撲が多かったように思います。40歳になり、改めて読み始めた時、いろんな考え方をする人がいる中、「人間として正しいか」という共通の規範を築くことができるのかと、最初は、考えてしまいました。しかし、繰り返し読むうちに、稲盛氏はこのように生きてきたということで、このように生き、発信、実践した結果の経営・人生であるのだと、理解するに至りました。その一貫した姿勢には気迫さえ感じ、そして自分の至らぬ点を洗い出す機会となりました。まずは、自分自身の行動から省み、実践していこうと思います。共に働く仲間達とのコミュニケーションと共有を大切にしたいです。各自の実践から、いつか、牧場グループのフィロソフィを築きたい、そうありたいと願います。

「お客様のニーズに応える。未来に挑戦するには、リスクに耐える財務内容、限りなく夢を描く。高い志。未来進行形での開発」。管理業務とお客様に接する販売業務を担う身には、厳しく叱咤されたように感じました。追わ

れることを言い訳にせず、そうありたいと強く願います。

(評者：高草木 里香)

本の感想文であるが、まずは恥ずかしい話から始めなければならない。私自身、ベンチャー企業や小さいけれども頑張る企業に興味があり研究したり実際にそのような企業に転職したことがある。なので大企業の内容は参考にならないと今までは決めてかかっていた。私が新卒で会社を選んでいたら、バブルがはじけて2年目くらいで氷河期と呼ばれていた頃、今回読ませていただいた稲盛氏の企業はすでに大企業となっていました。すでに親元を離れていましたが、実家近くにも京セラの工場があり地元の優良企業。まさかそんな大企業がベンチャーから始まっていたなんて、、、。自分の見聞の狭さを感じ、「大きな道のりも小さい一歩から」、「この不透明な時代の手本」と刺激を多々受けることができました。

この著書の中で一番出てくるフレーズ、それは企業内で物事を決める判断基準であるということも述べられています。「人間として何が正しいか その原則に従って行動すべし」「人間として正しいことを正しいままに追求することでした。経営というものは、経営者の人格の投影でしかありえなく、それ以上でもそれ以下でもないということです。常に他社(他者)の目にさらされる環境にある中で、自分(自社)だけを考えていては人も企業も成長出来ない、自分の利益ではなく他人の利益を考え正しく実行する事が必要であると仰っております。

企業を立ち上げ経営上一番確かなものはなんだろうという疑問お持ちになっておられたようですが、一番大切なのは『人の心』ということです。経営上大変苦労するのは人をまとめ上げていくことですが、人・従業員の心がわかり満足させていないと仕事への影響が出てきます。「従業員の物心両面の幸福を追求する」ことを行い、従業員と力をあわせ「人類・社会の進歩発展に貢献すること」が経営の本質たる事と導きだされております。

人生における高い志が事業や物事を成功させあるエネルギー源であるようですが、方程式を導きだされております。人生成果の方程式：「考え方」×「情熱」×「能力」で導きだされておりました。

現在も不透明な世の中ですが、人間としての道を踏み外すこと無く日本の未来に貢献したと考えます。

(評者：高橋 利明)

本書では、いきなり「はじめに」で、『ここに著した通りに経営を行い、人生を生きていけば、必ず会社は発展し、個人も素晴らしい人生を送ることが出来る…「成功の方程式」を記した、経営や人生のバイブル』と著者自身が述べる。凄まじい自信だ。しかし、『必ず成功する』そんなことあるはずがない。

稲森氏自身が、本書に書いてあることを実践し大成功を収めたことは否定しない。むしろ、稲森氏だからこそできたことなのだと思う。稲森氏の手がけた企業再生の具体事例には興味があり本書を読み進んだが、あくまでも完璧を目指す姿勢は、誰にでもできることではないと感じた。逆に言えば、誰にでも当てはまりはしないのだ。

著者は、京セラ成功の理由を『自らの経営と人生で苦闘する中で得た考え方とあり方を…ただひたすらに貫いてきたから』とし、経営判断の基準は『人間として何が正しいのか』『世間でいう筋の通ったもの「原理原則」』にあるとしている。

「原理原則」、これは著者によると『正・不正や善・悪などは、人間の最も基本的な道德律であり、子供の頃から両親や先生に繰り返し教えてもらい、自分の血となり肉となっている最も身近な規範』だそうだ。また、「人として正しいこと」、これが何なのか、言及は見当たらない。

私は、「正しいこと」とは何か、模索し続けることこそが人生だと思っている。ほとんどの戦争は「正義」を争っているのだ。「原理原則」も、生まれた場所や生きてきた環境によって人それぞれではないだろうか。必ずしもみんながいい両親や先生に育てられるとは限らない。壁にぶち当たりながら自らの原理原則を打ち立てていく、これが人生なのだと思う。

私は、会社経営の経験もないし、会社勤めもほとんどしたことがない。ただ、政治家として、個人事業主として、常に、自ら判断し、決断し、行動してきた。その際には、稲森氏と同じように(といっておこがましいが…)自ら信じることに従ってきたつもりだ。しかし、思うところに到達することはできなかった。だから、今、自らの足らざる部分を探すために白州郷牧場にいる。甲斐駒の懷に抱かれた土と水や生き物、そこで懸命に働く人々、そこに答えがあるのではないかと考えて。これとて、正解なのかどうかはわからない。ただ、誰かの成功体験をなぞっても、成功にはつながらない。否、なぞることなどできない。これからも自らを信じて進むのみである。

(評者：小斉 太郎)

書評

「(株)貧困大国アメリカ」 岩波新書 堤 末果 著



本書は『ルポ貧困大国アメリカ』、『ルポ貧困大国アメリカⅡ』(共に岩波新書)に連なる完結編となっている。初版が2013年6月に発行されている。ミシガン州のデトロイト市が財政破綻の申し立てをする数週間前だった。

本書にもデトロイト市の惨状が描かれている。もともと治安の良い地域ではなかったが、GM(ゼネラルモーターズ)社の破綻がとどめとなり、学校や警察、消防署といった公共サービスは軒並み凍結状態となった。強盗にあって警察に通報しても来るのは1日2日経ってからという有り様だ。2000年から2010年の間に、住民の四分の一が州外に逃げ出してしまったそうだ。保険金目当てで自宅に放火するという事件も後を絶たないという。

一体アメリカで何が起きているのだろうか。著者の堤末果氏は、経済界と金融界が結託して富を独占する「コーポラティズム」が進行中だと警告する。1%の富める者と99%の持たざる者との二極化が世界中で広がっているという。貧困や格差といったものがもはや解決すべき問題や課題ではなく、新たな「コーポラティズム」としては維持されるべき必須要素となりつつある。

自治体の財政破綻によって、地域内のインフラや公共サービスは大手企業へと売り払われている。ミシガン州では2011年に「非常事態管理法」のもとで公教育の解体が進められた。公立学校は閉鎖に追い込まれ、かわりに銀行家や企業が経営する「チャータースクール」が誘致される。高い授業料と一定以上の学力が必要とされるため、多くの生徒が行き場を失うこととなった。同様のことはハリケーン・カトリーナの被害を受けたニューオーリンズ州でも起きた。災害で崩壊した公立学校を復興させ

る代わりに建てられたのが、大量のチャータースクールだったという。こうした民営化が進めば進むだけ大手企業の株価は上昇していくのだが、大多数の住民にとっては生活に不可欠な公共サービスですら手の届かないものになりつつある。

解雇をされたり、まともな教育を受けられずに貧困層に釘付けにされた人々は、SNAPという食糧支援プログラムに登録し、わずかながらの食費を政府から受けとる。2008年のリーマンショック以降、猛烈な勢いでこの受給者数が伸びている。財政が逼迫しているにもかかわらず、政府が積極的に広報・宣伝をしているからだ。なぜ政府は、雇用対策よりもその場しのぎでしかない生活保護対策に力を入れるのか。ウォルマートのような大手小売り業者にとって、SNAPはまさに「ドル箱」となっているのが実態だという。安い食料品を求めてSNAP受給者が殺到するからだ。食糧支援という名目の裏側にまで、資本の論理が侵食している。

巧妙に仕組まれた収奪構造を、本書を含めた三部作では丁寧に追っている。リーマンショックに端を発する金融危機の際、アメリカ政府は公的資金を使って金融資本に対する救済措置をとったにもかかわらず、あおりを受けて没落した中間層は「生かさず、殺さず」という状況にどんどんと追い込まれている。経済学者の水野和夫氏が言うように、「国家は資本家の使用人」になりさがってしまったのかもしれない。

(評者：内藤 光)

本書は、利益のみを追求する巨大企業に国家が主権を奪われる「株式会社化」していくアメリカについてのルポである。アメリカで起きている急激な二極化、貧困の拡大…アメリカ国内の出来事にとどまらない恐怖に満ちた内容だ。

「GM食品」のラベル表示義務化の是非を問う法案は現在23州で議論されているが、大手食品・バイオ企業は「手間と人件費増大で食品価格がはねあがる」と多額の費用をかけた大規模な反対キャンペーンで対抗する。これは、「消費者が口に入れるものについて知る権利」と「危険性の指摘は非科学的」という主張の対立で、そのまま福島原発問題にも置き換えられる話だ。食と農に関する章で書かれていることは、映画「フード・インク」や「モンサントの不自然な食べ物」にも詳しく描かれている。「モンサントの不自然な食べ物」は、すべてネット検索で得られる情報を元に行っていることを強調する一風変わった構

成で展開するのだが、これがモンサント社(多国籍バイオ化学メーカー / PCB、枯れ葉剤、牛成長ホルモン、除草剤ラウンドアップ、GM作物の開発企業)からの訴訟攻撃を回避するためというのは、同社からの訴訟と社会的抹殺のための謀略がいかにも凄まじいかということだろう。

資本主義が何よりも優先される世界では、効率よく利益が流れ込んでくるシステムの種をまく畑はどこでもいいのだ。それが、食や農や医療という人の生命の根幹にかかわる業界であろうと関係ない。そのシステムを上手く回すために、莫大な資金を投じて政治やメディアを買収し、社会の仕組みを都合良くつくり変え、御用学者が火種を消して回る。「SNAP」という国家ぐるみの貧困ビジネスによって、ジャンクフードばかり買われる構造を押し付けられている貧困層。「ショック・ドクトリン」と呼ばれる惨事に便乗した資本主義は、ハリケーンに襲われたニューオーリンズや、財政破綻したデトロイトなど、危機に陥った自治体を標的にしはじめ、公共サービスや教育を受けることにも格差が立ちはだかるようになってしまった。

問題の本質は、メディア戦略によって、いつの間にか論旨をすり替えられ、耳ざわりの良いものにねじ曲げられる。人は自分の頭で判断していると思っていても、少なからずイメージに翻弄されてしまうのだ。そのことを巨大企業はよく理解しているのだろう。

希望が全くない訳ではない。ITを駆使した抵抗運動が企業を動かした。「2013年3月、ホールフーズ(全米最大のオーガニック・スーパー)は2018年までに店内に置く全てのGM作物および原料にGM由来有機物を使用した食品にラベル表示することを発表」。環境NGOのメンバーが覆面調査の内容を動画でネット上に暴露したことがきっかけだった。ホールフーズが突然方針転換した理由はモラルに目覚めたのではなく損得を計算した結果に過ぎないが、対抗策としては有効だ。目には目を、グローバリゼーションにはグローバリゼーションで対抗する。「人間らしい生き方をすると決めた意志を持つ個のグローバリゼーション」による「1%」への抵抗が始まっている。

(評者：織田 淳子)



藤原シンクタンク
遠山郷研修に参加して

経営・経済情報を配信しております、シンクタンク藤原事務所が主催する遠山郷藤原学校へ1泊2日で参加してまいりました。遠山郷は長野県の最南端、飯田市の南信州・村上地方の山深い谷にあり、飛騨の白川郷、越後の秋山郷と並んで「日本三大秘境」のひとつと言われています。国の重要無形民俗文化財に指定されている遠山郷の霜月祭、神様の湯治場の伝説がある秘境の谷に湧いた天然温泉「かぐらの湯」、日本のチロルと言われる下栗の里、南アルプスの雄大なパノラマを望むしらびそ高原、南アルプスの恵みをたっぷり含んだ名水・観音霊水など、

数多くの伝統文化や雄大な自然が残っており、「人と自然の本物の共生」の体験場所として提供しています。

一泊二日で行われました勉強会はこれからの世の中の動きについての講演が行われました。

～ 20世紀と21世紀の企業内構造の違いについて～

20世紀は集中型、21世紀は分散型である。20世紀特色業務としては(TV局などの)編集局やデスク業務がそれにあたる。1点集中する時に何のコンテンツを見せるかを整理する業務が中心業務となる。事が正しいかどうかの判断では無く、同期(横並び)との競争によってなりたつ。21世紀特色業務として、コンテンツ収集業務があげられる。ネット・BS・CS放送は編成はいらない。これはすべての特色・個性が認められる時代を示している。昭和の時代は同じ価値観の人(モノ)をつくる時代、では平成は? 平成時代のあるべき姿は「宇宙」。宇宙の姿は渦巻き状態。宇宙なら(渦の中心にいるのか、端にいるのか)自分の立ち位置を自分で決めることができる。渦の求心力となる初速を発する事が大切であると結論づけている。

不透明な時代だからこそ、やりたい思いを大切にし儲け先行の考えを改めるべきであるということを学びました。
(高橋 利明)

韓国「ブルム農学校」訪問

ブルム農学校は韓国の洪城地区に1958年戦後まもなく設立された。当時地区の人口の七割が農業従事者であった。しなしながら、農民に力はなく農業技術も高いものではなかった。都市への流入も始まっており、農民・農村にちからがなくなっている時代であった。

ブルム農学校は、キリスト教の学校として「共に生きる」ことをモットーに農民の生活を改革するために設立した学校です。

「共に生きるとは」、

1. 神と共に生きる
2. 人と共に生きる
3. 自然と共に生きる

を考えることができる人を育てる事を基本においています。

通常、韓国の学校では地域とのつながりを持ちません。ブルムの地域は貧困で都市に出る事ができませんでしたので、学校で学んだことを地元で活かして生活できる教育が必要でした。1975年日本の三重から韓国に見えられて、これからは有機農業の時代ということを説かれ翌

76年からブルム農学校も無農薬(有機)農業を実施しました。1990年代、有機の稲作を実施し、韓国で初めて無農薬あいも農法を始めました。

学校内ではさまざまな共同事業を立ち上げが行われていました。パン屋、本屋、信用組合、新聞社、木工所などさまざまです。運営が出来るようになりました地域住民も利用できるよう公開していき地域住民の為の事業になっていきます。

地域に根ざした学校づくりと共同体事業運営は今後日本でも参考になることと感じました。
(高橋 利明)



キララ秋の学校 2013



もぎりたての
トマトだよ～

10月12日から14日までキララ秋の学校が開催されました。

今回は参加者が10名と例年の秋の学校と比べてにぎやかなものとなりました。
お天気にも恵まれて、子どもたちも秋の白州を存分に楽しめたのではないのでしょうか。

牛の世話・たまごとり・ミニトマトの収穫

朝起きてからまず牛のお世話に。餌となる稲わらをあげるお仕事なのですが、みんなここまで間近で牛を見たことがないのか最初はたじろいでいました。そのあとは鶏舎に行ってたまごとり。怖くて入れない子もいるんじゃないかと心配しましたが、杞憂だったようです。みんなこの後の朝食で食べるたまごを持って帰ってきました。帰り道、ちょっと寄り道をしてミニトマトとトマトのなるハウスへ。大きなトマトを美味しい美味しいってほおぼっていました。こんなに喜んでもらえる作り手としては本当にうれしくなります。

キララ秋の学校日程

10月12日 (土)

6:00 起床

朝の散策

朝食～朝の散策で集めた卵で卵かけごはん

稲刈り

昼食～田んぼでお弁当

麴の種付け

かぼちゃタルトづくり

落ち葉集め

アートづくり

お風呂

収穫祭～古民家でいも煮

就寝

15:00
JR西国分寺駅集合

18:30 白州到着予定

お風呂・夕食

自己紹介

就寝

10月14日 (月)

6:00 起床

朝の散策

朝食～朝の散策で集めた卵で卵かけごはん

焚き火で焼き芋

片付け・荷造り・作文

昼食～焼き芋その他

閉校式

13:00 解散



これが「はざがけ」

稲刈り

実りの秋といえばやっぱり稲刈り!ということで各自にカマをもってもらってずんずんと稲を刈っていきました。雨の影響で稲が倒れてしまっていて、ちょっと刈りにくかったかもしれませんが、みんな一生懸命やっていました。刈った稲はある程度の束にして「はざがけ」をします。このまま数日間天日干しにすると、旨味と香りのあるおいしい新米になります。



麴の種付け

麴の種付けに挑戦しました。日本食の大本ともいえる麴。蒸したお米に麴種をふりかけて混ぜ合わせます。翌日、発酵して熱を出している様子を観察しました。出来上がった麴はレシピと一緒にお土産として持って帰りました。

森のアートづくり

自然の形を楽しもう、ということで土手や森からひろってきた木の実や葉っぱを素材にして

アートづくりをしました。すぐに投げ出してしまうかと思いきや、ものすごい集中力を発揮して没頭していました。キララの学校のブログにてカラー写真が見られますので、そちらもぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kilalaschool/>



たき火・焼き芋

秋と言えばやっぱり焼き芋ですね。森から枯葉や枯れ枝を集めてきてたき火をしました。焼き芋を待ちきれないのか、すぐに火が通るからということで栗を焼きはじめる子も。子どもの柔軟性ってやっぱりすごいです。焼き芋の出来はというと…若干こげてしまいましたが、しっとりとして美味しくいただきました。



(内藤 光)



キララ冬の学校がまもなく開催!

2014年1月4日(土)~1月7日(火)

キララの冬は自然の厳しさと美しさを感じる学校です。

学校の様子は
こちらから!



<http://ameblo.jp/kilalaschool/>
<http://www.facebook.com/hakusyugou.bokujo>

Bioアナリスト養成講座



9月22日～23日に
一般社団法人：生きもの
の認証推進協会主催の
Bioアナリスト養成講座
が、ここ白州郷牧場
にて開催されました。

同団体が推進する「生きもの認証制度」とは、生産者の田畑に生息する虫や草花を調査し、その多様性によって農産物の安全性や環境への配慮を認証するしくみ。帳票類をチェックするだけ

でなく、実際に田畑
に出て見聞きするこ
とを重要視したこの
制度は、消費者が
自然を観察する力
を身につけて生産
者や販売者とのコミュ

ニケーションを深めていくというねらいがあるとのこと。
今回開催された講座はその担い手となるBioアナリスト
の育成を目的としており、座学だけでなくフィールドワーク
も含めた密度の濃い時間となりました。

(内藤 光)



週末宿泊企画in白州 第一弾！ 「麴に触れる旅」

去る11月23日～24日に、宿泊ワークショップ企画「麴に触れる旅」が白州郷牧場にて行われました。第一弾ということもあり、手探りの企画と運営ではありましたが、ありがたいことに4名もの方にお申込みいただきました。

和食の調味料のベースはほとんどが麴。良い麴があれば、美味しいお味噌やみりんや甘酒が出来る…種付けを体験したり、麴料理を味わってもらうことで、日本人にとって本来とても身近な麴について体感してもらおうというコンセプトの企画。お客さまは、スマホやタブレットを駆使しながら撮影～メモも熱心に取りされていて、知的好奇心にあふれた素敵なお客さまばかりでした。

夕食は自家製の麴と素材をつかった手料理でおもてなし。塩麴や甘麴で短時間漬けただけで肉や魚の旨味がぐっと増す…一体麴は何をしているんだろう？ 麴でつくった甘酒のやさしい甘



お米に
もやし(麴菌)を
ふっているところ。

み。にんにくを漬けた塩麴はパスタなどイタリアンにも使えそう！
はお客さまのアイデア。麴って本当にすごい！

麴と生物活性水で化粧水をつくらたり、鶏舎で卵拾いやちようど飼育が
始まったばかりのヒヨコ舎を見学したりと、キララの学校「大人バージョ
ン」も少しか体験していただきました。おまけ企画の
鶏舎見学でしたが、皆さんのはしゃぎっぷりを拝見
して新たな企画のアイデアも浮かんだり。
今後のワークショップ企画もご注目ください！

(織田 淳子)

新企画は
こちらから
発信します！

<http://www.hakusyu.jp/>



<http://www.facebook.com/hakusyugou.bokujo>